

『とはずがたり』における 「かみ（上）」「うへ（上）」の意味・用法

牧野 さやか（まきの さやか）

大谷中学高等学校非常勤講師

saya5003@yahoo.co.jp

「キーワード」

とはずがたり, 上, かみ, うへ

「要旨」

『とはずがたり』における「かみ（上）」「うへ（上）」の用例を意味ごとに分類し、考察した。「かみ」は2例のみで、「うへ」は76例であった。「かみ」は2例とも身分の高い人や場所を示すものであった。「うへ」は表面を示すものと、ある事柄と他の事柄との関係を示すものが多く見られた。他に、屋形、上着、身の上など、様々な分類が見られた。また、「上」という文字そのものを表す用例も見られた。

1. はじめに

本稿は『とはずがたり』における「かみ（上）」、「うへ（上）」の用例を意味ごとに分類し、考察することを目的とする。

2. 調査方法

2.1 調査資料

本稿で使用する『とはずがたり』のテキストは、次の通りである。
久保田淳校注・訳(1999)『新編日本古典文学全集47 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』
小学館（以下、『新編』と称する。）

2.2 調査手順

『とはずがたり』に用いられている「かみ（上）」、「うへ（上）」の用例をすべて抜き出し、意味・用法の記述、分類を行う。用例を記す際は、『新編』の本文で「かみ（上）」、「うへ（上）」が用いられている箇所を抜き出し、(巻、頁数、行)の順で記す。(V490.1)は巻5、490頁、1行目ということである。また、用例には通し番号を付した。

3. 『とはずがたり』における「かみ（上）」、「うへ（上）」の意味・用法

3.1 意味・用法による分類

【かみ（上）】2例

①身分・地位などが高い人。また、そのような場所。2例

- (1) 「大納言がありつる折ののやうに、見沙汰してさぶらはせよ。装束などは、上へ参るべき物にて」など仰せ下さるは、(I 245. 04)
- (2) わが御身の訴訟にて贖はせられて、また御所に御贖ひあるべきか」と仰せあるに、
「上として、咎ありと仰せあれば、下としてまた申すも、(II 292. 06)

→上一人
→上下
→上中下
→上の醍醐

【うへ(上)】76例

I 具体的用法

①物の上部。38例

④表面。うわべ。27例

- (1) いと思はずにむつかしければ、返し遣はすに、袖の上に薄様の札にてありけり。
(I 196. 09)
- (2) 夜もすがら泣き濡らしぬる袖の上に、薄き単衣ばかりを引き掛けて立ち出でたれば、
(I 205. 10)
- (3) 長絹の直垂の上ばかり着て、その上に袈裟かけて、「念仏、仲光も申せ」とて、
(I 229. 05)
- (4) 生を享けて四十一日といふより、初めて膝の上に居そめけるより、十五年の春秋を送り迎ふ。(I 230. 05)
- (5) 諷誦にとて賜ふ。同じ札に、さらでだに秋は露けき袖の上に昔を恋ふる涙そふらむ
(I 232. 14)
- (6) 置き所なくこそ」とて、思へたださらでも濡るる袖の上にかかる別れの秋の白露
(I 233. 02)
- (7) 東の山の端にぞ横雲わたるに、むら消えたる雪の上に、また散りかかる花の白雪も折知りがほなるに、(I 246. 05)
- (8) 中縹なる紙に水を描きて、異物は何もなくて、水の上に白き泥にて、「くゆる煙よ」とばかり書きたる扇紙(II 302. 13)
- (9) 雨おびたたく降れば、帰るさの袖の上も思ひやられて。(II 305. 12)
- (10) 本尊に向ひ持経を開く折々もまづ言の葉を偲び、護摩の壇の上には文を置きて持経とし、御灯明の光にはまづこれを開きて心を養ふ。(II 312. 06)
- (11) たびたび辞退申ししを、ねんごろに仰せありて、袴の上に妹が水干を着て舞ひたりし、(II 342. 01)
- (12) 清水の橋の上までは、みな御車をやりつづけたりしに、(II 347. 12)

- (13) 同じ間の南の簀子に机を立てて、その上に御経箱二合置かる。(Ⅲ407.09)
- (14) 母屋の西の一の間に、御簾の中に纏綯二畳の上に唐錦の茵を敷きて、内の御座とす。(Ⅲ407.12)
- (15) 同じき西の廂に屏風を立てて、纏綯二畳敷きて、その上に東京の錦の茵を敷きて、准後の御座なり。(Ⅲ408.01)
- (16) 庭の池水言ふべくもあらず、漫々たる海の上に漕ぎ出でたらむ心地して、(Ⅲ420.06.)
- (17) これさへ見捨てがたきに、田舎人と見ゆるが馬の上四、五人、きたなげならぬが、またこの花のもとにやすらふも、(Ⅳ425.12)
- (18) 所のさまおもしろしとも、なかなか言の葉ぞなき。漫々たる海の上に離れたる島に、岩屋どもいくらかもあるに泊る。(Ⅳ430.16)
- (19) 寝殿には小舎人といふ者の卑しげなるが、わらうづ履きながら上へ昇りて、御簾引き落としなどするも、いと目も当てられず。(Ⅳ437.06)
- (20) 墨染の袂は御覧じもぞつけらると思ひて、賜はりたりし御小袖を上に着て、女房の中に混じりて見まゐらすに、(Ⅳ462.03)
- (21) 「我苦海の鱗類を救はむと思ふ願あり」とて、自ら宝前より出でて、岩の上に踞れまします。岩のそばに桜の木一本あり。(Ⅳ471.03)
- (22) 高潮満つ折はこの木の梢に宿り、さらぬ折は岩の上におはしますと申せば、あまねき御誓ひも頼もしくおぼえたまひて、(Ⅳ471.05)
- (23) 例の鳥羽より船に乗りつつ、河尻より海のに乗り移れば、波の上の住まひも心細きに、ここは須磨の浦と聞けば、(Ⅴ485.06)
- (24) 彼の島に着きぬ。漫々たる波の上に、鳥居遙かにそばだち、(Ⅴ487.07)
- (25) 鳥居遙かにそばだち、百八十間の回廊、さながら浦の上に立ちたれば、おびたたく船どももこの廊に着けたり。(Ⅴ487.09)
- (26) 面々になどすめり。九月十二日試楽とて、回廊めく海の上に舞台を立てて、御前の廊より上る。(Ⅴ487.13)
- (27) かねてより院御幸もならせおはしまして、ことに厳しく庭も上も雑人扱はれしかば、「墨染の袂はことにいむな(Ⅴ531.04)

㊥屋形。3例

- (28) 早朝の供御果つるほどに、台盤所に女房たち寄り合ひて、御湯殿の上の口には新大納言殿・権中納言、あらはに、別当・九五、(Ⅱ284.14)
- (29) 何事にかと思ひて参りたるに、御前には人もなし。御湯殿の上に一人立たせたまひたるほどなり。(Ⅲ351.13)
- (30) 常よりのどやかなる御物語も、そぞろはしきやうにて、御湯殿の上の方ざまに立ち出でたるに、(Ⅲ369.13)

→御湯殿の上

㊦高い位置。高い場所。5例

- (31) いたう崩れ退きたる所に、さるとりといふ茨を植ゑたるが、築地の^上へ這ひゆきて、元の太きがただ二本あるばかりなるを、(I 236. 13)
- (32) ただ新院の御前ばかりに置かむずるを、ことさら懸りの^上へ上ぐるよしをして、落つるところを袖に受けて、(II 316. 08)
- (33) 夕日は御殿の^上にさして、峰の梢に映ろひたるに、(IV 454. 08)
- (34) また熱田の宮へ参りつつ、通夜をしたりし、夜中ばかりに御殿の^上に火燃え上がりたり。(IV 462. 15)
- (35) 通島とは、^上に屋の棟のやうなる石、空ろに覆ひたる中、(IV 470. 12. 062)

㊧表側。外側。3例

- (36) さまざまに取り違へて裁ち縫ひぬ。重なりは内へまさりたるを、^上へまさらせたれば、(IV 442. 02)
- (37) 、^上へまさらせたれば、^上は白く、二番は濃き紫などにて、いと珍かなり。(IV 442. 02)
- (38) 「この御社の千木は、上一人を護らむとて^上へ削がれたる」と聞けば、何となく、「玉体安穩」と申されぬぞ、(IV 469. 02)

㊨身の上。3例

- (39) 御匣殿さへ、この六月に産するとて失せたまひにしも、人の^上かはと恐ろしきに、大納言の病のやう、(I 222. 02)
- (40) 御父が声にて、「何しにか見せける。人の^上ならむに、よしなし。また、御里居の隙をうかがひて、(I 241. 14)
- (41) 二条殿の御局の御仕事なれば、まづ一番に人の^上ならずやあらむ」と仰せ出だされたれば、(II 287. 05)

→人の上

㊩上着。2例

- (42) 「聖の賜びたりし袈裟は」とて請ひ出でて、長絹の直垂の^上ばかり着て、その上に袈裟かけて、(I 229. 05)
- (43) 蘇芳の匂ひの内へまさりたる五衣に青き単衣重なりたり。^上は、地は薄々と赤紫に、濃き紫、青き格子とを、(IV 441. 15)

㊪身分の高い人。また、そのような場所。5例。

㊫身分の高い人。2例

- (44) この上げ鞠を泣く泣く辞退申ししほどに、器量の人なりとて、女院の御方の新衛門督殿を^上八人に召し入れて、勤められたりし。(II 316. 11)
- (45) 隔てもなく、また坊主もなし。ただ、修行者、行きかかる人のみ集まりて、^上もなく、下もなし。(V 489. 09)

㊬上座。3例

- (46) さるべしともおぼえず。今参りは女三の宮とて、一定上にこそあらめと思ひながら、御気色のうへはと思ひて、(Ⅱ320.04)
- (47) 今まねぶ人の、これは叔母なり。あれは姪なり。上に居るべき人なり。隆親、故大納言には上首なりき。(Ⅱ321.02)
- (48) 隆親の卿、『女、叔母なれば、上にこそ』と申しさぶらひけるやうも、けしからずさぶらひつる。(Ⅱ339.09)

Ⅱ 形式的用法

①ある事柄と他の事柄との関係を示す語。22例

④さらに添え加えること。15例

- (49) 何とやらむ、そぞろはしきやうなることもあるうへ、いつしか人の物言ひさがなさは、「大納言の秘蔵して、(Ⅰ209.08)
- (50) 院の御産、角の御所にてなるべきにてあれば、御年もすし高くなせたまひたるうへ、さきぎきの御産もわづらはしき御事なれば、(Ⅰ210.09)
- (51) かかるしどけなきふるまひも、目も耳も恥づかしくおぼゆるうへ、かかる思ひのほどなれば、心清くてこそ仏の行ひもしるきに。(Ⅰ248.03)
- (52) 太政大臣の女にて薄衣は定まれることに候ふうへ、家々面々に、我も我もと申し候へども、(Ⅰ276.13)
- (53) 懐より庖丁刀・真魚箸を取り出でて、このそばに置く。「このうへは」としきりに仰せらる。(Ⅱ289.06)
- (54) またさりととも同じ心なるらむと思ひつること、みな空し。このうへは文をも遣はし、言葉をも交さむと思ふこと、(Ⅱ312.09)
- (55) 還御なりにけり。このうへは今参り、琴弾くに及ばず。(Ⅱ323.01)
- (56) たらちめの跡弔ひにまかるべきついでに」と申ししを、「五月ははばかりうへ、苔の跡弔はむ便りもいまいまし」(Ⅱ337.04)
- (57) 今二日果てぬも心やましけれども、車をさへ賜はせたるうへ、嗟峨にさぶらふを御頼みにて、人も参らせたまはぬよし、(Ⅲ373.11)
- (58) 皆人々里へ出でなんどして、はかばかしき人もさぶらはざりつるうへ、これにあるを御頼みにて、両院御同車にてなりつるほどに、(Ⅲ373.15)
- (59) かくて還御なれば、「これは法輪の宿願も残りてはべるうへ、今は身もむつかしきほどなれば」と申して、(Ⅲ380.02)
- (60) 「まことに、この上をしひてさぶらふべきにしあらず」など、なかなか出でて後は、思ひ慰むよしはずれども、(Ⅲ402.03)
- (61) さりがたく申すに、出家のならひ苦しからじ。そのうへ誰とも知るまじ。ただ京の人と申したりしばかりなるに」(Ⅳ440.11)
- (62) 後嗟峨院御隠れの折は御所に奉公せしころなりしうへ、故大納言、「思ふやうあ

りて」とて御素服の中に申し入れしを、(V509.04)

(63) 身の有様を一人思ひ居たるも飽かずおぼえはべるうへ、修行の心ざしも、西行が修行のしき、(V533.08)

→この上

→そのうへ

㊤(「一は」の形で) からは。7例

(64) 御おぼえも人にはことにて、春宮の御母にておはしますうへは、御身がらといひ、御年といひ、惜しかるべき人なりしに、(I232.07)

(65) 「我位浅く候ふゆゑに、祖父が子にて参り候ひぬるうへは、小路名を付くべきにあらず候ふ。(I276.09)

(66) 一定上にこそあらめと思ひながら、御気色のうへはと思ひて、まづ伏見殿へは御供に参りぬ。(II320.04)

(67) 「何とてあれ、さるべきことかは」と言はるるうへは、一旦こそあれ、さのみ言ふ人もなければ、(II321.06)

(68) 「なべて世の恨めしくはべりて、思ひ出でぬるうへは、いづれを分きてか」とばかり言ひて立ち出でぬるうへは、(II330.11)

(69) あさましけれども、目をさへふと見合せたてまつりぬるうへは、逃げ隠るべきにあらねば、つれなく居たるところへ(II335.05)

(70) 涙の隙なかりしを、払ひ隠しつつ、『この仰せのうへは、残りあるべきにはべらず。まことに前業の所感こそ口惜しくはべれ。(III366.06)

㊦貴人の妻の称呼の下につける語。4例

(71) 紫の上には東の御方、女三の宮の琴の代りに、(II318.13)

(72) 御覧じ知りたるに」とて、「明石の上にて、琵琶に参るべし」(II319.01)

(73) 西の御方なれば、紫の上に並びたまへり。(II320.01)

(74) 御約束のままに入らせたまふに、明石の上の代りの琵琶なし。事のやうを御尋ねあるに、(II322.08)

→明石の上

→紫の上

IIIその他

(75) 下の御所の弘所にて御事はあり。上の御所の方に、車ながら置かる。

(II341.07.049)

→上の御所

(76) 従一位藤原朝臣九十の算を賀して制に应ずる歌」とて、なほ上の文字を添へられたるは、古き例にや。(III415.13.018)

- 上の空
- 上葉
- 雲の上
- 上北面（じょうほくめん）

4. まとめ

「かみ」の用例は少なかったが、「うえ」は用例も多く、多くの分類があった。以下に分類の結果をまとめる。

「かみ」は場所（御所）として使用されているものは1例。人として使用されているものは1例であった。

「うえ」のⅠの用法の①㊦は「～の上」となっているものが24例あり、物の表面を表す用法が多いと言える。また、①㊧は3例、すべて同じ用法で、女房の詰所を示している。そして、①㊨も「～の上」となるものが、5例のうち4例で多かったが、そのものとの空間があるものは、①㊩に分類した。①では「～の上」となるのが多く見られた。

②は3例とも「人の—」となっている。①のように「～の上」となっているも、「人の上」となる場合は、身の上を意味することがわかった。

④は人に対して使用されているものが2例。上座を意味するものが3例。源氏物語の趣向の女楽を催した際に座席についての話が書かれており、その場面で「上」を上座として使用している。

Ⅱの用法の①㊦は「うへ、」とし、次の文に続くように使用されているものが10例で多いが、「うえは」という使用も見られる。①㊧は「うえは、」という形の場合は「からには」と使用するということがわかる。

②は、歌会があり、源氏物語の趣向の女楽を催したので、このような呼称が出現した。

Ⅲの（75）の例は伏見御所であるが、「上の御所」と「下の御所」がある。このように使用し、どの場所を指しているかわかるように区別しているが、上記の分類には当てはまらないので、その他に分類した。同じく、（76）は「上」という文字そのものをさすため、上記の分類には当てはまらないので、その他に分類した。